

北海道枝幸町における学生との 地域資源活用実習報告

山川和彦¹

1. 麗澤大学外国語学部

要旨 オホーツクミュージアムえさしが取り組んでいる「歴史と文化が人をつなぐ交流促進事業」の一環として、麗澤大学山川和彦ゼミと連携し、枝幸町の潜在的な地域資源をふるさと教育や体験型観光、情報発信に活用するための「地域資源活用実習」を実施した。本論はその地域資源活用実習の報告である。

キーワード：地域資源活用, 地方創生, アクティブ・ラーニング, 枝幸町

1. はじめに

報告者は、これまで学生の地域連携活動を企画、実施してきた。日常生活地域ではない場所において活動する場合、学生は外部者・観光客・ゲストであると同時に、ホストが気づかない「ご当地」の魅力を発信する存在ともなる。ある意味で学生はホスト・ゲストの間を浮遊する。学生の積極的な関与、意識、視点の切り替えが必要である。そのためには事前研修が不可欠で、いかに学生の気持ちに火を付けるかが教員の役割といえる。これは実習が短期間である場合にはなおさらである。そこで、今回の連携実習に先立ち、報告者はオホーツクミュージアムえさし(以下、ミュージアムと略す)、オホーツク枝幸ブランド推進本部(以下推進本部と略す)と事前打ち合わせを行い、プログラム内容を確定し、それに基づいて事前研修を用意した。

なお、地域と学生の連携方法の一つにインターンシップがある。インターンシップは社会経験、業務体験、企業文化の理解など参加者の学習に主

たる目的がおかれているのに対し、今回の連携実習では学生と受入先の「協働」が中心となり、インターンシップとは性格が異なる。

さて、この報告では、次節において、この研修の位置付けを示し、その後第3節において連携実習の内容と参加者の講評を示していく。第4節では、事後活動の内容を示すが、その中には学生の提言も含まれる。そして最後にまとめとして「教室」と「現場」を結びつけるミュージアムのあり方にも言及しておく。

2. 連携実習の文脈化—アクティブ・ラーニングと地域実習

今日の日本社会において、地方創生はキーワードになっている。「まち・ひと・しごと創生法」(法律第136号、平成26年11月28日)に基づき、枝幸町においても「枝幸町まち・ひと・しごと創生総合戦略」が2015年に策定されている。その中の基本目標の一つとして「豊かな地域資源を活用し安定した雇用をつくる」があり、基幹産業

(水産業、農業)の安定、強化に加え、オホーツク枝幸のブランド化があげられている。その施策に体験プログラムの提供、広域観光の推進が含まれる。この施策に今回の実習は合致する。

一方、大学教育においてはアクティブ・ラーニング^{注1}や課題解決型学習(PBL: Project Based Learning)といった教育スタイルが重視され、教室での学習に加え、地域活動を行うことが奨励されていると言える。今回参加した学生は、石垣島に関心のある学生と一緒にボーダーツーリズムを考える自主企画ゼミナール^{注2}を立ち上げ、ボーダーツーリズムの枠組みでオホーツク文化に関する学習を行ってきた。具体的には、オホーツク海沿岸全般に関する学びとして司馬遼太郎『オホーツク街道』を読むことから始めた。その後、沿岸の市町がどのようにオホーツク文化を取り上げているか自治体のホームページで情報を収集した。さらに、実習の中で行う料理の試作の参考としてアイヌ料理に関する記事や目梨泊遺跡に関する文献講読を行い、事前学習とした。

また、実習においては事後活動も重要である。一般論で言えば単位認定のためのレポートを課すという方法で事後活動をさせることになるが、地域との連携実習においては単位認定だけではなく、地域への成果還元という視点も必要である。今回の活動では、後述する事後活動を行っている。

3. 連携実習の内容

3.1 連携実習の概況

期間：令和元年9月3日～8日(3日は到着日、8日は出発日)

参加者：麗澤大学 教員・学生(2年生2名、ベトナム人留学生1名) 計4名

事業担当：オホーツクミュージアムえさし、枝幸町オホーツク枝幸ブランド推進本部

注1 このような学びは「Society 5.0に向けた学校ver.3.0」(文部科学省)にも示されている。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/06/20/1406021_17.pdf

注2 麗澤大学では一定条件をクリアすれば自主的に企画したゼミに単位認定をしている。

事業支援：北海道開発局稚内開発建設部地域振興対策室

3.2 詳細な活動内容と参加者評価

(1) 地域の歴史・文化資源の発掘

実習初日の4日は、はじめにミュージアムの展示である自然環境、オホーツク文化の歴史、昭和時代の生活史を職員の解説を受けながら学習した。その後、三笠山展望閣から市街地の立地を確認した。午後は目梨泊遺跡の発掘現場の見学と神威岬でドローンの活用実習を行った。

学生は事前学習としてオホーツク文化について文献資料で学習をしたが、ミュージアムに展示されている出土品や復元家屋の解説、臨地実習により、理解を深めることができたと言える。特に本州との時代区分の差異は北海道の歴史を改めて認識させるものであった。さらにミュージアムが展示するデスモスチルスについては一種のロマンを感じるものであった。今回参加のベトナム人学生はオホーツク文化の歴史に関心をもち、日本人学生は昭和時代の黒電話を物珍しく体験していた。今後、学芸員あるいは地域ガイドによるレクチャー型の着地型ツアーが実現できれば、地域文化の理解を促進することになるだろう。

(2) 地域の食材・観光資源の発掘

このテーマに関しては4日夜に歌登キャンプ場にて星空観察を行い、5日午前中には枝幸沖クルージング体験と海釣りを行った。その後、枝幸町観光協会観光推進普及員の丸山晃氏の説明を受けながら、鮭・鱒の増殖施設にて樺太マスの採卵場への移動の様子を見学した。続けて推進本部調理室にて、地域素材として鮭の解体、いくら作りなどを行いつつ、翌日の創作料理の準備をした。6日午前中は、推進本部、北海道開発局稚内開発建設部が主管する南宗谷3町連携事業の枠組みを活用して「そうや自然学校(中頓別町)」の協力を得て、北見幌別川でのカヌー下りを試験的に実施した。

午後は食材活用実習を行い、3品の調理を行った。一品目はホタテ貝を活用した創作料理「枝幸焼き」である。これは関西の明石焼きにヒントを得て、干し貝柱の戻し汁をだしとして卵を溶

き、たこの代わりにホタテの貝柱（解凍）を入れ、たこ焼きの形状に焼く。ただ、食感はたこ焼きというよりは卵焼きに近いもので、白だして食する。ホタテ貝は枝幸町の特産品のひとつであること、材料は一般家庭でも用意しやすいことから、この品を考案した。製作においては卵をベースにするので成形が難しく、卵と小麦粉の配合が難しいことと、家庭用たこ焼きを使用することから、仕上がりを整えるのが苦労する点であった。二品目は「オホーツク鍋」^{注3}とでも言えるものである。目梨泊遺跡からの出土品からオホーツク人が食していたと思われるものが想定されている（西本1994）。それを参考に当時の食の再現を試みる取り組みである。ここでの指導は前掲の丸山晃氏である。醤油などの調味料がないことを想定し塩のみの味付けで、鮭をベースとした鍋料理を作成した。同時に、枝幸町は酪農がさかんであることから、牛乳からにがりを用いて牛乳豆腐を作成し、それをういたチーズケーキの製作を行った。これは酪農家であり、ミュージアムのボランティアである開地保氏の指導によるものである。なお、その製作過程において牛乳ににがりを入れた後に出る乳清（ホエー）を飲用した。

枝幸沖でのクルージング&魚釣り体験、北見幌別川でのカヌー体験とともに、学生たちに有意義な体験であった。海釣りが動的、男性的なイメージであるとする、カヌーは静的、女性的なイメージで、親水性をモチーフにしたアクティビティでも対比が興味深い。カヌー体験中には、ミュージアムに展示してある鳥類の観察もでき、風景は雄大な北海道そのものである。乗船・下船場所が整備されるか、長靴着用という指示があれば、一般的な観光素材として十分に成り立つと考える。一方、海釣りは一般の旅行者を想定した場合、出港できない、そして一匹も釣れない可能性、強風時に波をかぶるというリスクをどう回避するかが課題として残る。

注3 網走市観光協会はモヨロ貝塚で発掘されたモヨロ人にちなみ、網走の名物料理として「網走モヨロ鍋」を打ち出している。<https://www.abakanko.jp/food/moyoronabe.html>

次に地域食材を活用した調理実習は、地域の人々の生活を知る上で意義深いものである。魚を自分で料理する学生は少ないと思われるので、いくら作り一つとっても新鮮な作業であった。今回は実現しなかったが、ホタテ貝も漁船から加工工場への移動、殻外し、干し貝柱作りなどのプロセスを見ることが産業観光になるとと思われる。一連のストーリーを知ることが、その食品を食する度ごとに「枝幸」という地域と結びついて、「心の中のリピート」になるとと思われる。

(3) 特色ある地域資源の発信

実習体験を元として、枝幸町に関する情報発信を行うことを意図されているが、この点は次節にて詳述する。

4. 事業における学生の事後活動と講評

4.1 事後活動

前節で示した実習後に、学生は以下の事後活動を行っている。

第一に SNS 等による情報発信である。実習中に撮影した写真、ミュージアム職員が撮影した写真を使いインスタグラムを通して枝幸町の魅力を発信した。掲載した写真の枚数は 26 点。その中でも神威岬を背景に撮影したオホーツク海の写真に反応があった。また、SNS でドイツ語、ベトナム語、中国語でハッシュタグをつけたところ、日本人だけでなく、台湾や中国人の反応も見られる。

次に、アンケート調査がある。枝幸町の認知や体験したメニューに関して、一般の学生にアンケート調査を行っている。その結果を簡潔にまとめると、カヌーや海釣りは体験希望が 8 割を越えるのに対して、調理実習は若干敬遠されている。また、オホーツク文化に関心がある学生は 3 割、枝幸町の場所を知らない学生が 8 割を越える。この結果だけを見ると、学生の反応はアウトドア系にあるが、このアウトドア要素は枝幸町だけに特有のものではない。どのような点が独自のかを明確化していくことが求められると思われる。

第 3 点目として「枝幸焼き」をメインとしたビデオを制作し、北海道農政事務所主催のコンペ

に応募している^{注4}。第4点目は日本語による小冊子の試作である。印刷媒体とするには、なお情報等を精査する段階にあるが、作成にあたっては既存の枝幸町のパンフレット、オホーツク海沿岸の近隣の自治体の観光パンフレットなども参考にした。特記すべきは、学生が選んだ表紙の写真が星空という点である。若者目線では枝幸町の切り取り方が、異なっていることがわかる。

4.2 活動に対する学生による講評

今回、枝幸町を訪問して活動したことに、参加学生は5点のコメントをあげている。

1点目は枝幸町までのアクセスの問題である。公共交通機関を利用して枝幸町へ行くのにはバスの本数が限られている。そして二次交通の課題もある。町内にはバス路線があるが、活動を考えると車が必要になる。この点から、結果的にレンタカーの利用となるが、旭川からの走行距離が約180キロあり、運転経験の少ない学生には、降雪時はもちろん夏場においても負担が大きい。

2点目はアトラクションに関する提言である。まず星空と野生動物のナイトツアー^{注5}の提案がある。鹿や狐といった野生動物は、動物園やサファリパークなどで見るのが普通であるが、ここでは野生の状態で見ることができる。枝幸町の夜空に広がる星空と自然に生きる野生動物を見る機会は、自然とかけ離れた都会人にとって興味をそそると思われる。そしてミュージアムに関しては体験的要素を増やすことがあげられる。2階展示室の中に、昭和時代には一般的だった黒電話の体験コーナーがある。このような方法で、オホーツク人の服装などを着用できる体験型展示にすると楽しみながら学ぶことができると思われる。今回の活動中に見聞したことから、スノーモービルを利用したアクティブを取り入れることもできよう。降雪量の多い地域の特性を生かしたアクティブ・ラーニングは、例えば沖縄県や東南アジアから訪

れる観光客にとって貴重な体験になるだろう。

3点目は、観光インフラとも言える内容である。国内旅行では、食とお土産が重要である。そこで学生から出された提案は、観光客を意識するとしたら、道の駅などの飲食店のメニューの工夫である。枝幸町の海の幸を使った料理を提供しているものの、枝幸らしいメニューが少ない。毛ガニはもちろんホタテや鮭、海の幸に恵まれた地域ならではのメニューを提供することが旅行者にとっては望ましい。また、酪農農家も多い地域であることから、乳製品を使ったスイーツの提供をPRしてもよいと思われる。

ハード面では、市街地以外の道路で街灯の設置が必要だと考える。日が暮れると街灯が少なく、夜道の運転が危険に感じられる。鹿や熊といった野生動物が現れることも少なくないので、事故防止には街灯を増やすことが必要と考える。対策として、ソーラーパネルで発電ができ、車が通ると明かりがつく仕組みにするとなお良いと考える。

4点目はツーリング客などをターゲットに一日観光ツアーのモデルを作ってみる。それは、地元の方にお話を伺ってツーリング客がいることがわかったからだ。飲食店やホテル、ミュージアムなど施設が掲載された地図ではなく、どの地点からどのような風景がみられるとか、夜に鹿がよく出没する地点などのマッピングも有益であろう。

5点目として、ユニバーサルツーリズムの視点から、ヴィーガンやグルテンフリーのスタイルもメニューとして考えることが好ましいという提言である。食材研究で製作したチーズケーキは米粉を使用し、グルテンフリーに対応した。アレルギーや信条による食生活の多様化が進展する中で、このような配慮は今後重要になると思われる。ちなみにベトナム人学生は生魚を食さなかった。このことから、枝幸の食のブランドを考えると、加熱調理されるメニューや山菜などの野菜類を活用したものも必要になる。

4.3. 教員からの評価

教員側からの評価としては、学生の事後活動が積極的に行われてきたことをみれば、この連携実習のプログラムに意義があったことは明白である。

注4 令和元年度「受け継ぎたい北海道の食」動画コンテストの開催について <https://www.maff.go.jp/hokkaido/press/syokuryo/keikaku/190716.html>

注5 2012～2015年にかけてうたのぼりグリーンパークホテルにタイ人旅行者が来ていた当時は、ナイトサファリと称して、夜に鹿を見に行くツアーが行われていた。

今後の活動を考えた場合、例えば、着地型ツアーとしての販売を想定した、コストやリスクなどのシミュレーションまで取り入れたPBL型の学習に発展させることも可能である。また、プログラムの多くは町と教員の協議の中で用意されてきたものである。学生が枝幸町を複数回訪問するようになれば、学生からプログラム提案なされるような次のステップへ移行できる。そしてプログラムの立案だけではなく、事前・事後活動全体を意識したPBL学習に発展させることができると考えている。今回は地域資源の発掘という視点で観光的に要素が多かったが、近年注目されているSDGsと関連させることも有益であると考えられる。

5. 総括

今回の活動は、枝幸町と山川和彦ゼミとの連携実習の第一回目であった。その目的はすでに記載したように、町としては学生目線での観光資源の発掘と情報発信にあった。また指導教員の立場からは、このような学外で行われる実習活動を通じた学生の学びの検証にあると言える。今回の体験メニューが、学生にとって意義深いものであったことは、学生の事後活動の充実を観れば明らかであると思う。

また、ミュージアムは、地域と大学を連動させる機能を持ち合わせている。カヌー体験後に、「初日のミュージアムで展示を見ていたことが、野鳥観察に結びついた」と学生から言われた。これはある意味でミュージアムが教室的機能と実践活動の結節拠点となっていると言える。あらゆる人に開かれ、自然・歴史・日常を記録し解説するミュージアムがあってこそその地域資源の覚醒だと改めて感じたところである。

今回体験したひとつひとつのメニューは、何も枝幸町だけで行えるものではない。しかしその組み合わせが可能になるのは枝幸町である。ここはその資源とそれを伝えよう、楽しんでもらおうとする人たちがいる。実はその人材こそが資源である。今回は協働できなかったが、郷土に対する研究意欲と愛情を持っている枝幸高校の高校生がいることも、また資源である。

付記

この報告の一部は、2020年2月22～23日タイ・バンコクにおいて開催されたタイ日研究ネットワーク Thailand—2019 国際シンポジウムにて口頭発表した。

謝意

この連携実習においては、オホーツク枝幸ブランド推進本部、オホーツクミュージアムえさしおよび関係の皆様の温かい支援によって実現しました。ここに参加学生とともに感謝の意を記させていただきます。

参考文献

- 菊池俊彦．オホーツクの古代史．平凡社，2009．
 佐藤隆広 編．目梨泊遺跡．枝幸町教育委員会，1994．
 田林明．商品化する日本の農村空間．農林統計出版，2013．
 西本豊弘．“目梨泊遺跡出土の動物遺体”．目梨泊遺跡．佐藤隆広．枝幸町教育委員会，1994，pp. 373-381．
 山川和彦．“地域の観光資源の生成と大学生のかわりに関する一考察”．タイ日国際シンポジウム論集．2019，pp. 66-70．



写真 1. ドローン操縦体験



写真 2. 実習生がドローン撮影した神威岬



写真 3. 観光名所「千畳岩」を体験



写真 4. ミュージアムを見学



写真 5. 釣り上げた魚をさばく



写真 6. 調理実習